

浜通りに芽吹く科学と芸術との融合活動

秋光 信佳

Akimitsu Nobuyoshi

東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所事故から10年目となる年が始まりました。この間、多くの関係者による不断の努力の結果、被災地である福島県浜通りの復興は徐々に進んできました。もちろん、未だに帰還困難区域が残り、ふるさとに戻れない方が多数いらっしゃることを忘れてはなりません。一方、被災地では創生に向かって新しい活動が芽吹きつつあることも事実です。拙稿では、浜通りの新生に向けた変化を紹介したいと思います。

筆者は2011年の原子力事故災害以来、南相馬市、浪江町、楢葉町、広野町等で放射線量測定や除染に微力ながら協力してきました。当初は未曾有の事故に対し、政府も多くの専門家も手探りで解決策を模索していました。この小稿を執筆中の2020年6月は新型コロナウイルス禍に世界中が翻弄されていますが、現在の社会情勢や雰囲気は、まさに原子力発電所事故直後からの数か月間を彷彿とさせます。今の社会の反応を鑑みるに、我々は2011年の事故から教訓を十分に学んでいないように思えます。新型コロナウイルスの流行する時代にこそ、原子力事故からの教訓を改めて学ぶ意義があると考えています。

さて、ここでは暗い話題から離れ、浜通りで感じる雰囲気の変化を述べたいと思います。それは、住環境の除染、交通網の復旧、及び学校や病院等の生活インフラの再建につれて、浜通りでは文化的営み、特に芸術表現に対する活動が顕在化しつつあることです。特に、科学技術と芸術表現との融合を目指したユニークな取り組みがあらこちらで始まっています。現在、筆者が主に活動する楢葉町では、昨年11月、筆者らが中心となって、宇宙と生命に関する講演会を開きましたが、講演会では遺伝子のDNA配列を音符に見立てた音楽が作曲され披露されました(図1)。更に、楢葉町では東京大学総合博物館と協力して、東京大学モバイルミュージアム構想が

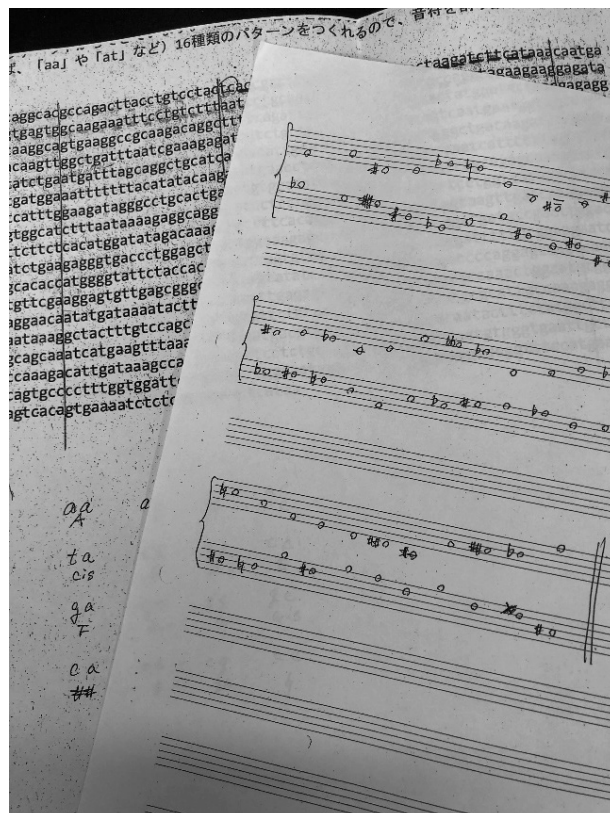


図1 2019年11月に開催した楢葉市民大学公開講座で披露した、DNA音楽

飲酒に対する強さを決めるアセトアルデヒドデヒドロゲナーゼ遺伝子DNA配列を元に作曲したときの楽譜。作曲とピアノ演奏は、楢葉町在住の音楽家・嶋川勉氏による

進んでいます。博物館とは人文自然科学と芸術表現の接点ですので、科学技術と芸術表現との融合から新しい表現が生まれることが期待されます。これらの活動が受け入れられる雰囲気が浜通りの自治体に生まれていることを実感します。

科学技術と芸術表現との融合を目指す活動は楢葉町にとどまりません。南相馬市では、震災後に小高区で書店を開業した作家の柳美里氏が、2020年夏に「浜通り舞台芸術祭」を企画していました。新型コロナウイルス感染防止対策からこの芸術祭は延期

されましたが、プレ企画として、「演劇×科学」の融合を目指したロボット演劇プロジェクト・アンドロイド演劇『さようなら』が2020年2月に仙台で公演されています。アンドロイドと生身の人間との共演に近未来の演劇の可能性が追求されました。今後、浜通りで開催される「浜通り舞台芸術祭」でも科学技術と芸術とを融合したユニークな企画が生まれることが期待されます。いわき市では、2018年3月から2か月にわたってキネティックアートの第一人者であるテオ・ヤンセンの展覧会が行われ、14万人が来場しました。キネティックアートとは動く芸術作品のことであり、その中に科学技術と芸術との融合が見て取れる作品群として知られます。キネティックアートを展開する場として浜通りが選ばれたことは、浜通りの変化とは無関係ではないでしょう。広野町では、2018年10月に開催された国際フォーラムで技術とアートを融合した芸術祭の開催に関するアイデアが発表されています。その後、広野町、楢葉町、富岡町の職員らが新潟県十日町市と津南町で開催された「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2018」の視察研修に行き、科学技術と芸術の融合について模索し始めています。そして、その実践として、昨年9月には「アートキャンプ in ひろの」が開催されました。そのほかにも、飯舘村では、越後妻有大地の芸術祭や瀬戸内国際芸術祭の企画運営で著名な北川フラム氏を総合ディレクターに迎えたアートプロジェクトが始動しようとしています。どのような内容かは不明ですが、放射

性物質による汚染と戦う村を舞台とした芸術活動には科学との共同が期待されます。また、福島大学が中心となって2004年から開催されてきた福島ビエンナーレが、二本松市と南相馬市で開催されました。福島ビエンナーレは芸術的視座からの取り組みですが、今後、浜通りとの交流から科学技術と芸術との接点が芽生えることが期待されます。

震災後10年を迎える今年、浜通りでは急速に文化的・芸術的機運が高まっています。おそらく、このような芸術活動を通じて、地元の人々が未だ言語化できていない負の記憶と思いを芸術として表現・昇華しようとしているのではないのでしょうか？そして、強大な科学技術が引き起こした原子力災害による負の記憶が、科学と芸術を融合させることで新しい表現として生まれ変わろうとしているのではないのでしょうか？このように考えると、現在の浜通りで沸き起こりつつある芸術活動は、地域アート活動を越えた新しい時代を先取る嚆矢になると考えています。そして、このような動きが本格化して行けば、福島県浜通りはユニークな文化情報の発信拠点として発展してゆくでしょう。放射能汚染というつらい歴史を乗り越え、新しい文化を発信するシンボルとして福島県浜通りが生まれ変わろうとしています。福島復興に関わる人々のみならず、科学や芸術に関心がある人々にとって、福島県浜通りは目が離せない存在になってゆくと思います。

(東京大学 アイソトープ総合センター)